

セーラの一考察

宗意, 和代

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

65

(開始ページ / Start Page)

101

(終了ページ / End Page)

124

(発行年 / Year)

2010-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006998>

セーラの一考察

社会学研究科 社会学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程2年 宗意和代

はじめに

日本において『小公女』という作品は明治のころから今にいたるまで読み継がれてきた。常に少年少女向けの文学全集に名を連ねきたいわゆる名作だ。セーラという少女が父の死により裕福なお嬢様から一転乞食同然の身の上となり辛い仕打ちを受けるが、やがて亡父の友人が現れ再び金持ちの世界に戻っていくという筋書きで、健気に耐え懸命に生きれば必ずや幸福は訪れるという美しい話として受け入れられてきた。この『小公女』はフランシス・ホジソン・バーネット“ A Little Princess ”(1905) (以降 A Little Princessと記述する)の翻訳である。原作 A Little Princessは、その約10年前に書かれたオリジナル版といえる “ Sara Crewe or What Happened at Miss Minchin’s ”(以降 Sara Creweと記述する) のページ数を大幅に増やして拡大した改訂版だ。オリジナル Sara Crewe は、1887~88年に雑誌セント・ニコラスに連載され、連載終了後の1888年に単行本として出版された。バーネットはこれを自らの手で1902年英国 (タイトル: A little un-fairy princess)、1903年米国 (タイトル: A Little Princess) で劇化した後、1905年に米国の劇と同じタイトル A Little Princessとして出版した。劇化は表現手法を変えることにより結果的に内容を成熟させたものとみられている (Holman, 1972, p167,361)。A Little Princessはオリジナル Sara Crewe の筋立てのまま、登場人物を増やし内容をより充実させている。人気作とはいえ、当時すでに多忙なベストセラー作家であった原作者が10年の時を経て改訂したという事実は原作者バーネットの意気込みを感じさせる。バーネットは「セーラは自分だ」と言っている。フランシス・ホジソン・バーネットという人は、二度の離婚に再婚や派手ないでたちなどが話題になり醜聞や批判も多かったということだ。さて『小公女』セーラの元の姿、原作 A Little Princess の Sara とはどのような少女だったのだろうか。

She had never been an obedient child. She had had her own way ever since she was born, and there was about her an air of silent determination under which Miss Minchin had always felt secretly uncomfortable.

オリジナル Sara Crewe の冒頭部分である。このオリジナルの唯一人の訳者明治の若松賤子は次のように訳している。

セイラは決して柔順な児では有りませんでした。生れたときから氣儘^{おちつ}いっばいをさせつけられて居升たし、沈着^{おちつ}て居る中に、なんとなく、氣丈な処が有升たから、流石のミンチン女史さへ、内心、薄気味わるく感じて居り升た。(若松, 1894)

オリジナルは、まず、セーラは「柔順な児」ではないと断ってから始まる。これは一つに当時の主役の女性像が「従順」であるのが一般的だったことがあるかもしれない。たとえば原作者バーネットの時代の女流作家たちの必読書ともいえるシャーロット・ブロンテ(1816 - 1855)『ジェーン・エア』(1847)の女性たちはとにかく従う。

was disposed to obey. いつも従う

it seemed a matter of course to obey him promptly. (エアは) すぐ従うのが当然のように思えた。

Habitually obedient to John, 常に従う(慣習的に)

I was about mechanically to obey him 機械的に従う

She obeyed him with what speed she might.

といった具合にobey（従う）が繰り返されている。

文芸評論家斎藤美奈子は、金井美恵子の『小春日和』文庫版の解説において今に残る翻訳少女小説の共通点は「親と離ればなれになった可哀な少女の物語」の枠組みを持ちながら、実際には、その枠を大きくこえて「元気な少女が逆境をバネに活躍する物語」になっていて最終的には「少女の成長と自立を描いている」と書いている。『小公女』セーラも勿論そこに含まれるわけだが“ She had never been an obedient child.”としっかり書かれていることを確認すれば私たちの抱いていたセーラ像よりもっと強いものを感じる。この原文never been an obedient～のくだりは改訂版 A Little Princessにはなかった。拡大版 A Little Princessは「従順ではない」と端的に書かずとも、そのような状況（situation）を並べて「従順ではない」性質を伝えている。オリジナル Sara CrewからA Little Princessまでの10年間に社会の状況も変わった。A Little Princessが出版された20世紀初めは、次第に活発化してきたフェミニズム運動が女性参政権の獲得に向けていよいよ本格的になってきた。1903年ごろには「女性社会政治同盟（W S P U）」のようにデモや打ちこわしなど暴力的な手段にでる女性たちも現れ、もはや女性は「家庭の天使(domestic angel)」が理想とされたビクトリア朝は終わっていた。女性に限らず人は家庭の中ばかりでは生きていけないものではない。そんな現実であれば never obedientと断らずともよいだろう。そもそも少女は従順なものという「環境」でないのだから、わざわざ否定するまでもないということだ。

しかしながら翻訳文学では、この「環境」が問題になる。というのも書き手と読み手の環境が違うからだ。原作者が暗黙知とするものが読み手の知らぬことであるために微妙な誤差（ズレ）が生じるわけである。

1．時代

オリジナル版Sara Crewは1887年に英国ロンドンを舞台に書かれた。英国は1830年代までが繁栄期である。蒸気機関の発明が国内産業に大改革をもたらし対岸のナポレオン戦争の影響で国内農産物は沸貴した。だが戦後の物価暴落から不況に陥り「天の恵みの時代」と言われた30年代のあとの40年代は「ひもじき40年代」といわれた。そのような40年代からの英国はもっぱら海外へ目を向け1840年中国でアヘン戦争を起こし1858年にはインドを植民地化して領土を広げた。しかし、1861年の南北戦争の後の景気は再び悪化し、さらに1873年世界同時不況で打撃を受けた後、経済は停滞の一途をたどった。産業革命以降、世界経済をリードしてきた産業国としての優位も19世紀後半からはアメリカやドイツの工業化により失われた。

セーラの物語が書かれた19世紀末から20世紀初め、不況による貧困から、国内では、とりわけ都市部において病気が蔓延し犯罪が横行した。そのような帝国の衰えに対して植民地インドでは国民会議が発足、ロシアと戦争を始めている（アフガニスタン戦争）。ロシアは当時の英国が最も脅威としていた国である。そんな社会状況の中、読み物の世界で大人気を博していたのは「シャーロック・ホームズ」のシリーズだった。ホームズというキャラクターは科学捜査は得意だが天文学など伝統的な学問の常識はなく、また仕事を引き受ける際に依頼者の身分は問わない。その人物設定はおよそ英国人らしくない。さらに対決する悪の相手はインドやアメリカなど英国の新旧植民地国からやってくる。現実に帝国の覇権と繁栄に翳りが見え始めた時に、英国人らしくらぬ探偵ホームズの物語が人気だった。架空の探偵ホームズは自国の将来に不安を感じ国の秩序と平和の回復を願う時代の人々の要請に応えるものだったのだろう。

2．原作者の目的

原作者フランシス・エリザ・ホジソン・バーネット(Frances Hodgson Burnett)は1849年英国工業地マンチェスターの高級住宅地に生まれた。父は室内装飾師兼家具屋として名士達のお屋敷に出入りする商人だった。だが、彼女が三歳のときその父が亡くなり一家の生活は暗転する。引き継いだ母親がまるで商才のないところに南北戦争後の不景気が重なり、まもなく破産状態となった。父の死後ホジソン一家は大きな家から小さい家へ、そして北の高級住宅地から南の工場町へ、ついにはイギリスからアメリカへと移住を強いられた。貧窮を極めるなかで長女のフランシスは働いて家計を支えた。作家になったのも、そもそもは「金を稼ぐ」ことが目的だった。彼女は初めて出版社に送った原稿に「目的は報酬です」と書き添えている。1873年幼なじみの医師スワンと結婚。夫スワンは医師といっても実質的には見習い中の身で家族を養うほどの収入はなかった。フランシスは結婚後も生活のために執筆を続けねばならなかった。彼女は自伝に「原稿製造機のごとく書いた」と記して

いる。

フランシスは1875年夫のパリ留学に同行した。その後ワシントンに戻り幾つかの作品を書きあげ、そして1886年“Little Lord Fauntleroy”(邦題：『小公子』)でついに大ベストセラー作家となった。当然経済的に困ることはなくなったのだろう。彼女はこのころワシントンに大きな邸宅を購入している。ただし自身はその大邸宅にほとんど寄り付いていない。邸宅購入の後、夫と子供たちをそこに残し彼女は単独でニューヨーク、ボストンなど米国内から英国ロンドンへと移動を続けた。そして1897年、夫との離婚訴訟を始めた。この年、彼女は英国ケント州のメイサムヒルに素晴らしい庭園付きの旧館を借りた。1905年のA Little Princessは、そのメイサムヒルの館で書かれたものである。彼女はメイサムヒルの家をこよなく愛し、1907年借地権切れで法的に手放さざるを得なくなるまで、ここを拠点に執筆にいそしんだ。

バーネットの人生は移住の連続だった。少女時代の工場町マンチェスターへの移動から始まり、米国へ渡った後も英米を絶えず行き来している。人気作家となり貧窮生活を脱して自宅を購入してもなお移動を続けたのはどのような心理からであろうか。その答えは、彼女の作品に示されている。たとえば米国の人気作家ポールオースターは、自著の登場人物について「どの人物も私の一部だ」「仮りにこうした作品全部を一冊にまとめたら、わが半生の書が出来上がるだろう。私という人間の多面体の絵になるだろう」(ポールオースター, 2004, p299)と述べている。翻って、バーネットは1896年「竜巻にまかれるがごとくすいこまれるようにして書いた」という話題作“A Lady of Quality”の出版直前に友人に宛てた手紙に次のように書いている。

この数日で分かったことがあるの。クロリダを新しい試みなんかじゃなかったのよ。これまでは、ぼかして書いていかたら分かりづらかったかもしれないけれど、『ローリーんとこの娘(“That Lass o' Lowrie's”)]は変装したクロリダよ。ゴージャスな宝石を身につけて派手なシンフォニーが鳴り響く中笑みを浮かべて地獄の門をくぐりぬけていったバーサ(Bertha “Through one administration”)も屋根裏部屋でお腹をすかせたセーラも、人をさげすんだ(disdainful)物言いをするプリンセスのセーラもそうよ。クロリダは初めて書いたキャラクターじゃないわ。私が今までの人生で考えてきたことを表現しているの(Vivian, 1927. p. 249)。

『ローリーんとこの娘』の主人公ジョーンは炭坑の娘だ。強く美しいジョーンは支配者階級の青年に愛され結婚を申し込まれる。求婚する青年にジョーンは自分が(貴族の)相手にふさわしい教育を身につけるまで待ってくれという。そして二人は最後に結婚する。ビクトリア朝時代の異階級間のロマンスは、その男女いずれかが死ぬことで結末となるパターンがほとんどであった。このように労働者と資本家のカップルに結婚という形の結末が用意されていることは大変新しい。

“Through one administration”のバーサは、上流階級の相手と愛のない結婚をする。バーサは華やかな社交界に生きながら満たされず孤独感と虚無感に苛まれる。この時代結婚は階級の階段を上る唯一の方法とみなされていた。だが、そうして望み通り上流階級の世界に入りこんだところで果たしてそこに異階級から来た者の居場所はあるのか。これは、もしかしたら原作者バーネット自身が実感したところなのかもしれない。彼女は作家として大成した後に少女のころ貧窮の果てに離れた故国英国に幾度も戻っている。米国では裕福なベストセラー作家として歓待されたものが英国ではそうもいかなかった。英国では貧しい生まれの者が米国へ渡って小金を持つと居場所をなくしてしまう(林, 2005, p122)。金を儲けても階級の階段は登れない。“Through one administration”は社会派の小説として高く評価されたがバーネットはこの後しばらく筆をおいている。そして2年の時を経て1886年に出された次なる作品が日本でも『小公子』のタイトルで大人気となった“Little Lord Fauntleroy”であり、その勢いによって翌年に書かれたのがSara Crewである。Sara Crewでは主人公のセーラはプリンセス(上流)のごとき世界と屋根裏部屋(下流)の生活の双方を体験する。それまで下流の者が上流に上りつめるまで、そして上りつめた後を描いてきた原作者は、今度はセーラという一人の少女を上下の両世界に入れて試した。そうして様々なヒロインを描いてきたバーネットが、それらの集大成として描いたのが“A Lady of Quality”(1896)のクロリダだ。クロリダは破産寸前の貴族の9番目の娘に生まれる。父の好みで男装させられ、男たちと狩りにでて酒宴に連なる。やがて15歳で男装をやめ、一転して社交界に躍り出る。そ

の後は生来の美貌と明晰な頭脳をもって望む物を次々に手に入れていく。まず大金持ちの老貴族と結婚し、短い結婚生活の後に夫の莫大な遺産を手にする。その後言い寄る昔の男を死なせてしまったりもするが最後には英国一高貴で裕福な青年貴族と結婚する。クロリダは自分の意思で行動し、金と地位、そしてついに心も手に入れる。男装から始まり遺産目当てと思われるような老人との結婚、さらに殺人を犯す過激なヒロインだ。“Through one administration”で社会派といわれたバーネットは今度は全くもって非道徳な作品を書いたとして非難された。

1902年ニューヨークタイムズは彼女の本が町の図書館から撤去されたことを報じている。

There is no indication that any of Burnett's children's stories came under fire for questionable content, although *A Lady of Quality*, one of her adult novels, was banned from the library in Evanston, Illinois in 1902, along with other books that were questioned on the basis of their morality.

(“Western Town Has Literary Censors” *New York Times*, 6 July 1902)

バーネットの作品は子供向けのものには問題視されるような内容なものはない。だが*A Lady of Quality*など大人向けの数冊は道徳上問題があるとしてイリノイ州エバンストンの図書館で禁止された。(筆者訳)

Sara Crewを翻訳した明治の訳者若松賤子は15、6歳ころから読み始めたという外国の小説の作家として、Dickens、Alcott、Lyttton、George Eliot、Victor Hugo、Charlotte Bronteなど12名をあげ、Dickensの“*The Old Curiosity Shop*”やHugoの“*Les Miserables*”などは再読したが、「多くは一読する折は食事の時間を忘るるほど読み込んだものでも程経た後には顧みるも厭になる」ような「年若のお方などにや有害無効」のものが多かったと述べている(若松, 1891)。日本のバーネット翻訳の第一人者である彼女は当時の外国文学に対してこのような意見を持っていた。その若松の審美眼にかなったのが Sara Crewだったわけである。若松はこれを『セーラクルーの話』として日本初の児童雑誌『少年園』誌上に連載している。当然「年若の」有害にはならないものと判断してのことだろう。若松翻訳の後『セーラクルーの話』の後身として*A Little Princess*の邦訳『小公女』は何度も訳されている。一方“*A Lady of Quality*”の邦訳はいまだない。だが、先の手紙のなかでバーネットは全てのヒロインはクロリダの変装だと言っている。クロリダもセーラも同じことを表現するために造型されたキャラクターということである。バーネットはいずれのヒロインも自分自身が人生において常に意識していたこと(care for)を表現するために描いたのである。

日本の作家夏目漱石『三四郎』の予告文に次のように書いている。

田舎の高等学校を卒業して東京の大学に這入った三四郎が新しい空気に触れる、さうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触して色々に動いて来る、手間は此空気のうちに是等の人間を放す丈である、あとは人間が勝手に泳いで、自ら波瀾が出来るだらうと思ふ、さうかうしてゐるうちに読者も作者も此空気にかぶれて是等の人間を知る様になる事と信ずる、もしかぶれ甲斐のしない空気で、知り栄のしない人間であつたら御互に不運と諦めるより仕方がない

漱石は「三四郎」という人間を東京という都会において泳がせてみたという。漱石がそうしたようにバーネットもセーラやクロリダたちをそれぞれの階級の世界において泳がせてみた。そうして自分が実人生において考えてきたことを問いかけているようである。

バーネットの人生は移動の連続であった。英国の高級住宅地から貧民街へ、英国から米国へ移り住み、渡米の後も英米を往来し移住を続けた。そして彼女自身も、富む者から貧しき者へ、そして作家として大成し再び富む者へ変身した。作品のヒロインたちと同様に彼女自身も変身して現実社会を試したようである。そのようにして、いったい彼女は何を見て何を思ったのだろうか。バーネットはベストセラー作家となった後もあまり幸福であった様子はない。長男ピビアンの記事によれば、家にいるときは常に具合が悪く「寝たり起きたり」の状態「常に疲れていた」という。そして、家庭でのそのような状態と裏腹に社交の場には奇抜といえるほ

ど派手な衣装で登場し話題を呼んだ。彼女に関する記録を見る限り生涯何か満たされないものがあったという感否めない。彼女は1901年ビクトリア女王の戴冠式での感動を記している。A Little Princessのセーラはマリーアントワネットを崇拝する。ビクトリア女王もマリーアントワネットも上流のLadyだ。バーネットはLadyになりたかったのかもしれない。だから、上流階級のセーラにLadyの意識を持たせたのだろうか。しかし現実にはLadyになることは不可能なのである。

セーラの時代に生きた作家アガサ・クリステイーは少女時代「Ladyになりたい」と言って、乳母に諭される。

“レイデイ・アガサ”となるには生まれがそうでなくちゃなりません。公爵、侯爵または伯爵などの娘でなくてはなりません。あなたが公爵と結婚なさればあなたは公爵夫人になりますが、それはあなたのご主人の称号からそうなるんです。生まれつきのものではありませんからね。(乾,1995, p84)

アガサは、乳母は「現実主義者」であり、このとき「どうにもならないものに突きあたった最初であった。なるうと思ってもなれないものが世の中にはあると思った」と書いている。アガサ・クリステイーはバーネットと同じ英国中産階級の生まれでお幼いころはかなり裕福な家であったが父親が財産管理に失敗し、さらにそのショックで病になりやがて死んでしまう。貧窮したアガサもバーネット家と同様に住まいを移っている。そのようなアガサが貧しい暮らしの中で最高の楽しみとして夢中で読んだのが『シャーロック・ホームズ』のシリーズだった。

3. 学校物語

セーラの物語の舞台は英国ロンドンである。ちなみに『セーラクルーの話』を訳した若松はこれを「東京でいふと、銀座のとおりのような」と訳している。バーネットの描いたロンドンは明治の銀座のようだったのだろうか。19世紀末から20世紀初頭英国の都市部では産業社会のなかで支配者層と労働者層の生活は全く異なり互いに想像もつかぬほどであった。階級が違えば慣習も言葉もちがう。まさに別の国の人間といってよい状態にあった。そんな中で学校を舞台にした「学校物語」というジャンルは学校物語産業という社会現象とともに存在していた(ウォルフオード, 1996, p.51)。産業として成り立つほど一般大衆に読まれていた。ただ、その「学校物語」の舞台はたいがい上流階級の子供たちが所属するパブリックスクールであり主役もやはり上流階級の子供であった。ジョージ・オーウェルはエッセー「少年週刊誌」に「学校物語」の起源としてトマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』(1857)とキプリングの『ストーキーと仲間たち』(1899)をあげ、これらは「下層階級の上流階級好みに訴えるように脚色され、彼らを時代錯誤の夢想の世界に誘うことによって現実から目を逸らせることになった」と述べている。「学校物語」というジャンルはイギリス特有のもので、それはイギリスの教育自体が階級問題の源になっているということを述べている(オーウェル,1995, p.190)。

Sara Crewが書かれた19世紀終わり頃、女子の学校生活を描いた作品は少なかった。また学校を舞台に描かれた作品は、良き教師や友を通して明るく希望に満ちて暮らしていく姿を描いた理想的なものが大半であった。学校という場に子供の人間性をゆがめる危険性もある一般社会と変わらない現実があるということに触れたものはなかった。たとえば先述した『ジェーン・エア』にしても学校は孤児となり叔母の家で虐待されて育ったジェーンが良き師テンブル先生や良き友ヘレンに出会えた救いの場所である。

原作者バーネット自身も少女時代に学校に通っている。しかし、そのHenry Hadfield先生の学校も信頼できる教師のいる温かい場所だった。したがってセーラの物語は原作者の実体験を描いたものではない。では原作者はなにゆえにセーラの学校の物語を書いたのだろうか。

産業革命後の農耕社会から産業社会への移行は人を農地から解放し産業のある都市部へと向かわせた。父親は都市部に働きに行き、特に家業を手伝う必要のない子どもは学校に入れられた。家から社会へと人は生き場所を移さねばならなかった。学校は人が初めて体験する社会だった。そこには英国社会の問題が露呈されていた。否が応でも階級の問題と向き合わねばならなかったのである。

4. 階級社会

オーウェルはイギリスの教育には階級の問題が明示されていると言っている。学校は、階級を意識せずにはいられない英国社会の現実をまざまざと見せつける場所だった。辞書によれば階級とは「生産手段や生産から得る利益などに関して対立する関係にある社会手段」(三省堂『大辞林』)ということである。つまり、普通は経済的背景によって「支配層」と「非支配層」、「富者」と「貧者」といった具合に区別される。だが英国の場合、階級は必ずしも経済的観点から分類されるものではない。英国の階級は「生活のあらゆる領域において人びとを区別しうる観念」(河合他,1982, p801)として存在する。英国階級の分類法はまず19世紀のイギリスの批評家マシュー・アーノルドが発表した上流、中流、下層(すなわち貴族、中産階級、労働者階級)の三分割方式があった。そして、その後、中流階級が上層、中層、下層の三つに分けられ、一番下の層は「庶民」として労働者階級とほとんど同じに見られるようになり、以来分類においては上流、中流の上、中、下そして下流の五分割方式がよく使われている。(石川, 1993, p41)ただし実際にはこれら5つの階層がさらに細かくランク分けされ、そのランクに応じた役割(仕事)が定められていた。

They were not servants of the best class, and had neither good manners nor good tempers, ~

その人たちはあまりたちのいい召使ではなく、ぎょうぎも悪く気だてもよくなかった。(川端 1961)

彼女らは性のいい使用人ではなく、行儀が悪いうえに、気だてもあらかった。(伊藤 1956)

使用人たちは行儀も悪いうえに気だてもよくなかった。(谷村 1985)

A Little Princess 原文からセーラをいじめる使用人たちの描写だ。このservants of the best classの“the best class”は「最高の」といった一般的な形容詞の意味に使用人(servants)の実際上のランクが加味されたものと考えられる。たとえばmaid servant(女中)と一口に言っても、最上位のHouse Keeper(女中頭:館における家政全ての指揮・監督と使用人の統率をする)からLady's Maid(侍女:主人の身の回りの雑用をするメイド)、そしてParlour Maid(客間女中)、House Maid(家女中)等々細かく分かれ、かつ、それぞれ役割が決められている。セーラの友達のベッキーはscullery maid(洗い場女中)である、これは女中の中でも最も低い身分だ。そして、さらに英国では階級が名刺代わりであり、また「階級=人柄」とみなしていた。ゆえに原文ではnot servants of the best class = good manners nor good tempers(低いランクの使用人は性格もマナーも悪い)と言っている。そもそも私立学校経営者の独身女性ミンチン先生くらいの階級の者が雇うことのできるクラスの使用人たちであるから上等なわけではない。だから礼儀知らずで性格も悪いという書き方である。ちなみに雇用者のミンチン先生の顔を伺い父を亡くしたセーラにつらくあたる使用人たちは‘The cook and the housemaids’とあるが、このcookすなわち料理人は使用人の中で最高位に位置する。そして原作者バーネット自身の演出による劇ではセーラの屋根裏部屋が料理人の部屋のとなりに設定されている。

そこで邦訳に戻ってみたいのだが果たして階級ということが読みとれるだろうか。訳だけ読めば何ら疑問は感じられないし、また全く間違ってもいい。ここに階級の匂いを鍵取るか否かは、あくまで読み手の置かれた環境に依存するものである。たとえservants of the best classをそのまま「最高クラスの使用人」としたところで、これを英国人のように理解する者はまれだろう。逆に読みづらい下手な訳と思われかねないのではないだろうか。

5. 本当のセーラ

5.1 I Tried Not to Be - 変わらぬ決意

第18章タイトル‘I Tried Not to Be’は次のように訳されている。

つもりはなかった(菊池 1927)

わたしはほかのものにはなるまいと思っていました(伊藤 1956)

ほかのものにはなるまいとしたのです(川端 1961)

わたしは、いつもそのつもりでした(曾野 2007)

この章タイトルは以下の本文に対応する。

"I TRIED not to be anything else," she answered in a low voice?"even when I was coldest and hungriest?I tried not to be."

「わたしはほかのものにはなるまいと思っていました」「がまんがならないほど寒くてお腹のすいているときでも、わたしはほかのものにはなるまいと思っていました」(伊藤 1956)

寒くてお腹がぺこぺこだったときでもその(プリンセス)のつもりでいました。(曾野 2007)

本文自体も訳者によって微妙に異なる。また1930年の菊池寛訳では完訳といえどもこの文を含む段落全体が省略されている。

父を亡くして生活が一変したセーラは、それでも他の何者にも変わらないと決意する。

"Whatever comes," she said, "cannot alter one thing. If I am a princess in rags and tatters, I can be a princess inside."

「どんなことになっても」「このことだけは変えられないわ。ぼろを着ていてもプリンセスということは心のなかがプリンセスということなんだわ」(伊藤 1956)

「ぼろを着ていても心はプリンセス」というのは作品の中で一貫して歌われるセーラの心意気だ。この「変わらない」ということは、つまり、元の金持ちの娘のまま上流階級の世界にいるという誓いに他ならない。'I can be a princess inside'すなわち、どんな外側(境遇)になろうと内側(精神)は変わらないと言っているのだが、これは「階級=人柄」の現実に沿っていないとも言える。ここに原作者の問いかけがあるのではないだろうか。さらにセーラは異階級(労働者)のベッキーに次のように語る。

"we are just the same - I am only a little girl like you. It's just an accident that I am not you, and you are not me!"

「だって、あなたも私も、同じ小娘じゃありませんか。私があなたのように不幸でなく、あなたが私のように幸せでないのは、いわば偶然(アクシデント)よ。」(菊池 1927)

「だって、わたしたち同じことよ わたしだってあなたと同じような女の子だわ。わたしがあなたのような境遇に生まれなかったのも、あなたがわたしのような境遇に生まれなかったのも、偶然のできごとよ」(伊藤 1956)

ここでいう「あなた(you)」と「私(me)」、つまりベッキーとセーラはそのまま下流と上流の意味である。セーラはベッキーが下流で、セーラが上流というのは単なる偶然、たまたまそうだっただけ(accident)と言っている。でも、それは変わらないのだ。セーラは変わらないと決意している。偶然にして上下に分かれたとはいえ、生まれついた階級は一生のものであり、またそう生きるべきだという考え方であり、これが英国人の考え方なのだろう。だから作品の中で変わらないのはセーラだけではない。階級という意味では登場人物誰一人として変わっていない。セーラは裕福な上流階級に戻り、ミンチン先生は中産階級の学校経営者であり続ける。そして召使のベッキーはセーラの使用人になるだけだ。

階級の違いをなくすということは、みずからの一部を亡くすことに他ならないという事実を覚悟しなければならない。

階級制度の枠外へ脱け出すために、個人的な高慢さを抑えるだけでなく、好みのおお半や偏見も抑えなくてはならないからだ。...ついには、本来の自分の名残をとどめることはできなくなるだろう(オーウェル, 1996 p.214-215)

5.2 Sara Crewe, or What Happened At Miss Minchin - ミンチン先生の学校で起きたこと

原題“Sara Crewe, or What Happened At Miss Minchin”(ミンチン先生の学校で起きたこと)とは何か。それはミンチン先生の学校でセーラが体験したことであり、一人の少女が上流と下流の両方の世界を見たことだろう。

しかし実際は、階層間は完全に遮断されていた。異階級の生活を体験し、それをその階級の外側から眺め語るようなことはできるはずがなかったのである。

Two nations between whom there is no intercourse and no sympathy; who are ignorant of each other's habits, thoughts and feelings, as if they were dwellers in different zones or inhabitants of different planets; who are formed by different breeding, are fed by different food, are ordered by different manners, and are not governed by the same laws ...The rich and the poor. (Disraeli, 1976, p96)

二つの国民。その間には何の往来も共感もない。彼らは、あたかも寒帯と熱帯に住むかのごとく、また全然別の遊星人であるかのごとく、おたがいの習慣、思想、感情を理解しない(筆者訳)

時の政治家ベンジャミン・ディズレーリ^(注1)は、産業革命期のロンドンにおける貧富の差を描くなかで、相容れない労使の関係を「二つの国民」(the two nations)と呼んだ。このベンジャミン・ディズレーリは時の女王ビクトリアの寵愛を受け、ビクトリアの夫であるアルバートの助言によりイギリス帝国を繁栄させた人物である。この時代の英国の作家ギaskell(Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810 - 1865)もその最も有名な小説『メアリ・バートン』(Mary Barton, 1848)の第1章で、「二つの世界」(two worlds)と表現している。

Don't think to come over me with th' old tale that the rich know nothing of the trials of the poor; I say, if they don't know, they ought to know. We're their slaves as long as we can work; we pile up their fortunes with the sweat of our brows, and yet we are to live as separate as if we were in two worlds;

もし金持ちが知らないなら知るべきなんだ。おれたちは働ける間は奴らの奴隷さ。我々は額に汗して奴らの財産を築いてやっている。なのに、二つの世界にいるかのように別々に暮らす運命なんだ(相川, 1999, p16)。

現実には人々は異なる階層の世界を想像すらできず、そのように断絶した関係においては互いに対立と憎悪の感情しか生まれなかった。

違う階層の人間については育つ過程において意図的に、また自然に、教え込まれていった。

「下層階級は悪臭がする」 - これこそ私たちが教え込まれたことなのである。まさにこの点に、乗り越えがたい障壁があることは明らかだ。身体のかなかにしみこんだ感覚ほど好悪の感覚のなかで根源的なものはないからだ。(オーウェル, 1996, p176)

中産階級のオーウェルは労働者階級の人間は不潔だと教え込まれた。それは「取り返しのつかないこと」だったという。一方労働者階級にとっても中産階級は金の亡者でしかない。そして自分たちを搾取しようとしている敵でしかない。異階級に対する敵愾心は一方的なものではない。19世紀後半の『パンチ』誌の典型的な漫画は、小柄で神経質な感じの紳士がスラム街を馬で通り抜けていくとき、チンピラの一団にやじられる様子が描かれている(オーウェル, 1996, p170)

^{注1} Benjamin Disraeli ベンジャミン・ディズレーリ(1804 - 1881):イギリスのビクトリア朝の政治家。首相にも在任。宿敵ウィリアム・グラッドストーンと共にビクトリア期のイギリス政党政治を牽引した。また、小説家としても活躍した。なおバーネットは彼の宿敵ウィリアム・グラッドストーンと交流があった。

オーウェルは言う。

階層間の断絶を克服するためには、ある階級が別の階級の目にどのように映るかを理解することから始めなくてはならない(オーウェル, 1996, p176)

翻ってセーラは、父の死によりプリンセスから無一文の孤児になり下がった。住む場所、食べる物、着る服、の全てが変わった。そして変わり果てた自分を見る他者の目を知る。セーラは「別の階級の目にどのように映るか(オーウェル)」を理解するのである。

セーラは外面の変化によって変わった周囲の視線を思い知る。そして、それでも自分が変わらないのだと決意するのだ。

セーラは屋根裏部屋の生活になっても「変わらない」。もとの上流階級の視線で人々を眺めた。そこでセーラの立ち位置と、そこから見えた各階層の人間たちについて確認してみたい。

5.3 セーラ の位置

5.3.1 父Crew

1) Innocent

セーラの位置は父Crewの階級にある。そして、この父の死を契機に物語は展開していく。

父の死によりセーラの運命は激変する。

she change in her life did not come about gradually, but was made all at once.

サアラの生活の変化はゆっくりとあらわれず、一度にどっとやってきた。(伊藤 1956)

セエラの生活は、その日からがらりと変りました。(菊池 1927)

父クルーの死により娘セーラの生活は上流から下流へと「徐々に」(gradually)ではなく「瞬時に」(at once)(中村保男『英和翻訳表現辞典』研究社2002)変わってしまう。

さてセーラの父Crewとはどのような人物か。

Captain Crewe was a rash, innocent young man

まだ若くって経験のない人 若松

気の早い世なれぬ人だったので

気のはやい、あまり世故にたけない人 伊藤

気が早くて世間なれがしていないので 曾野

訳出なし 菊池 1930

Little Princess第一章「Sara」に、まずこのように書かれている。Innocentはおよそexperienceの反対の意味だ。

元のSara Crewの冒頭にはより具体的に次のように書かれている。

But the fact was that he was a rash, innocent young man, and very sad at the thought of parting with his little girl, who was all he had left to remind him of her beautiful mother, whom he had dearly loved And he wished her to have everything the most fortunate little girl could have; ~

父と言うのがまだ若かくって、経験のない人では有り、殊に深い思慮もなく、気楽な性質でしたから、いとしい亡き妻が唯一の忘れ形見と愛でた、セイラに分かれるが何より悲しく、凡そ世に合わせといわれる子供が持つものは、どんなものでもセイラに遣り度とおもひ、

バーネットはSara Crewの前作大ヒットした“Little Lord Fauntleroy”の主人公セドリックの父親のことを次のように描いている。

he had not been brought up to work, and had no business experience,
是迄の育ちが育でしたから働いて活計を立てることに慣ず、事務上の経験も有ませんかつたが

セドリックの父親は英国貴族の三男で親に見捨てられたために自力で金を稼がねばならなくなる。英国の貴族たちは働かず資産だけで生活することを美德とする。ただしセドリックの父のように親に見捨てられたり、あるいは、そうでなくとも次男、三男など家の資産を継げなかったものは、何らかの職を得て金を作る必要に迫られた。しかし、そもそも「働く」ということとは無縁の状態です。育ってきた彼ら貴族の子息たちは、仕事というものにまるで慣れていない。結局セドリックの父は若死にしてしまう。セーラの父クルーも全く同じだ。

"your daddy is not a businessman at all, and figures and documents bother him. He does not really understand them, and all this seems so enormous.

セエラよ、お父さんは、知っての通り事務家ではない。数字や、書類はひどく私を苦しめる。(菊池 1927)

ねえ、セーラ、おまえも知っているように、おとうさまは事務屋ではない。だから、数字や書類などにはまったくうんざりしてしまう。その内容はよくわからないが、とにかくたいへん大きなしごとです。(谷村 1985)

ええ、セーラ、おとうさまは事務的なしごとにむかないから、数字や書類はうんざりしてしまう。内容はよくわからないが、なにしろ分量がすごく多くてね。(川端, 1961)

このように資産を当てにして生活してきた者が何らかの事情でそれを当てにできなくなり自ら金を稼がねばならなくなった結果、精神的にも肉体的にも追い詰められ早死にしてしまうというケースはよくあったようだ。アガサ・クリステイの家も幼少の時は相当の財産があったが財産管理を人任せにしていたところ祖父が死んだとき「あるはず」の金がなく突然生活資金を作らねばならなくなる。それまで慈善事業とクラブ通いの日々だったアガサの父は突然の状況の変化で心労がたたり持病の心臓病が悪化し、やがて死んでしまう。

父はのらくら者であった。不労所得であんらくに暮らしていける時代で、そうした収入のある人間は働かなかった。(乾, 1995, p28)

父は金持ちの息子だったので、一定の収入がつけねにあるのは当然のこととしていた。

ところが祖父が死ぬと急に金の問題に直面する。財産管理人の管理がなされておらず、あるはずの財産がない。

父は困惑し意気消沈してしまったが、もともと事務的な人ではなかったのだからどうしていいかわからなかった。(乾, 1995, p126)

アガサの父は、これが原因で病気になり、やがて死んでしまう。アガサは「財政的な心配事が父の健康にさわったに違いない」と思ったと書いている。

つまり彼ら資産で暮らしてきた階級の者は金について全く考えていない。金を作ることも管理することもできないのだ。たとえ高等教育を受けていたとしても金については何も教えられていない。そういう意味でinno-

centなのである。

そのようなクルー大尉の死は必ずしも同情的には描かれていない。

クルーの死を知らせに来たbusiness manのバロー氏はbusiness manでもないのに事業（business）に手を出したクルーに対して批判的だ。

He spent money lavishly enough, that young man.

あの青年はめっちゃくちゃに金を使いますからなあ。（川端 1961）

Lost every penny. That young man had too much money. The dear friend was mad on the subject of the diamond mine.

一銭残らず失ったのです。あの青年はあまりお金を持ちすぎていたんですな。その親友というのは、ダイヤモンド鉱山のことで気がいみたいになってしましてね。（川端, 1961）

クルーのような裕福な階級のもとは異階級の別世界のことなど見ようとしなかった。だから自分たちの無知を自覚することもなく「ダイヤモンド鉱山」の事業に乗り出したりするということだろう。

"You see, little Sara," he wrote, "your daddy is not a businessman at all, and figures and documents bother him. He does not really understand them, and all this seems so enormous. Perhaps, if I was not feverish I should not be awake, tossing about, one half of the night and spend the other half in troublesome dreams. If my little missus were here, I dare say she would give me some solemn, good advice. You would, wouldn't you, Little Missus?"

「セエラよ、お父さんは、知っての通り事務家ではない。数字や、書類はひどく私を苦しめる。熱があるせいだろう、夜中まで寝られないで、よるよる歩き廻っている。やっと寝ついたかと思うと、いやな夢ばかりだ。私の小さい奥さんがそばにいてくれたら、きっと何かよい忠告をしてくれるにちがいないと思う。きっと何かいってくれるだろうねえ。」（菊池 1930）

クルーは「事務家」ではない。セドリックの父と同じく事務上のことは経験がない(= innocent)。それなのにダイヤモンド鉱山の事業（business）に手を出した。そのようなCrewの死を報告に来た事務弁護士「businessman」のバロー氏の物言いには批判が込められている。

"Diamond mines spell ruin oftener than they spell wealth," said Mr. Barrow. "When a man is in the hands of a very dear friend and is not a businessman himself, he had better steer clear of the dear friend's diamond mines, or gold mines, or any other kind of mines dear friends want his money to put into. The late Captain Crew?"

「ダイヤモンド鉱山などというものは、富よりもむしろ破産をうむばあいのほうが多いものですよ。」

「親友の言うままになって。自分自身が実業家でないなら、ダイヤモンド鉱山であれ金鉱であれ、友人が金をつぎこませようとする鉱山からは手を引いた方がいいんです。なくなったクルー大尉は...」（谷村 1985）

innocentには 'foolishly trustful' の意味がある。セーラの父もセドリックの父もまるで世間知らずで頼りない。働かず資産を食いつぶして生活していた上層の者たちは社会的にはまるで生産性がないともいえるが、彼らは英国上流階級の一つのプロトタイプなのだろう。そしてinnocentは彼らを象徴する形容詞とも思われる。なお、このinnocentだが『小公女』訳者の一人伊藤整は『小公女』翻訳と同時期(昭和16年)イーディス・ホートンの“The Age of Innocence”(1920)という作品を翻訳している。“The Age of Innocence”はヨーロッパの貴族社会の上っ面を模倣しただけで自由の精神などまるでないアメリカの上流社会に生きる女性が世間の常識にとらわれず自分の意思を貫き人生を切り開いていこうとする物語だ。邦題は『汚れなき時代』となっているがinnocentにはpureのような純粹無垢の意味は薄いのである。

2) Eton

父の友人カリスフォード氏はかつて共に「イートン校でクリケットをした」思い出を語る。英国イートン校は実存する名門校だ。歴代の首相をはじめとする数多くの著名人を輩出している。今でもイギリスの裕福な家庭では、子供が生まれるとすぐにイートンの入学希望者リストに名前を登録するほどだ。相当の難関校だが何より大金がかかる。最近のデータだが2005年年間学費は寄宿費を含めて2万2380ポンド（日本円にして約450万円）。平均的な収入のイギリス人家庭では到底手の出ない額だ。つまりEton出身といえ、それは相当に裕福な家ということである。

英国Eton校は長年の間、社会の経済的不平等を助長する上流階級の特権の象徴と見なされてきた。ただし、今やそうした恨みがあまりに強まり、オールド・イートニアンとして知られる卒業生らは公立学校の卒業生から蔑まれることを恐れ自分の受けた教育をひけらかさないよう用心するようになっているが。

もう1つ、Crewのさらに詳細な位だが、敬称captainは海軍であれば「大佐」陸軍であれば「大尉」となる。海軍大佐であれば相当に高位だが邦訳は一応に「大尉」となっているが陸軍が海軍かで階級はかなり違ってくる。

5.4 セーラの意識

5.4.1 Soldierとして

Papa is a soldier. If there was a war he would have to bear marching and thirstiness and, perhaps, deep wounds. And he would never say a word?not one word.

(まだ私もきつと耐え通すつもりよ。誰でも耐えなければならぬのね。兵隊さんたちの我慢なんか大変なものだわ。) 私のお父様は軍人なのよ。戦争でもあると、お父様は喉のひりつくようなこともあるし、^{ふか}深傷を負うことだってないとはいえないでしょう。でも、お父様は一言だって、苦しいと仰しかったことはないわ。」(菊池 1927)

"Soldiers don't complain," she would say between her small, shut teeth, "I am not going to do it; I will pretend this is part of a war."

「軍人は愚痴なんかこぼさない。」セエラは歯をくいしばりながらいうのでした。「私だって、愚痴なんかいうものか。これは私、戦争の一つだっていうつもりなのだから。」(菊池 1927)

"I suppose soldiers feel like this when they are on a long and weary march," she often said to herself. She liked the sound of the phrase, "long and weary march." It made her feel rather like a soldier.

「きつと兵隊さんが長いつらい進軍をするときには、こういう気分でののだわ」とサアラはしばしばひとりだけで考えた。サアラは「長いつらい進軍」ということばのひびきが好きであった。そう言うと、自分が兵隊になったような気がした。(伊藤 1956)

セーラはつらい時自分が「兵隊さんだったら」と考える。「長いつらい進軍」というフレーズが好きだと書いてある。1890年英国生まれの作家アガサ・クリステイは7歳くらいのとき、母親に「南アフリカのわが勇敢な兵隊さんたちのことを考えなさい」と説教されたという。セーラと同時代のアガサの母がいう「兵隊さん」は南アフリカのボーア戦争に行っている兵士たちのことである。そのボーア戦争についてアガサは「自分の国や生命に影響を与えない戦争」「勇敢な兵士や雄々しい若者によって戦われた英雄物語の出来事」だったと書いている(乾, 1995, p22)が、ボーア戦争に限らず英国人は戦争ということに対して少なくとも我々日本人よりかなり楽観的だったようだ。ボーア戦争の後英国は我が日本と同じように二つの大戦を経験したわけだが、いずれの大戦の時も国民は「すぐに方が付く」「じゅうたんを防虫剤いりてしまいこむまでもない」といった調子で、戦争は遠くの戦地で「兵隊さん」がやすやすと片付けてくれるものという感覚だった。興味深いのは母親にこう言われたアガサは「勇敢な兵隊さんになんかなりたくない。わたし、臆病者になりたい!」と泣き喚いたということだ。「長いつらい進軍」ということばのひびき好きだと一人ごちるセーラとは全く逆である。

5.4.2 Marie-Antoinette

困難にぶつかったとき、「つもり」になるというのがセーラのやり方だ。セーラはまず父を思いsoldierの「つもり」になったあと、今度はMarie-Antoinetteの「つもり」になる。

There was Marie Antoinette when she was in prison and her throne was gone and she had only a black gown on, and her hair was white, and they insulted her and called her Widow Capet. She was a great deal more like a queen then than when she was so gay and everything was so grand. I like her best then. Those howling mobs of people did not frighten her. She was stronger than they were, even when they cut her head off."

マリイ・アントアネットは玉座を奪われ、牢に投げこまれたけど、その時になってかえって、宮中にいた時よりも、女王様らしかったっていうわ。だから、私マリイ・アントアネットが大好き。民衆がわアわア騒いでも、女王はびくともしなかったそうだから、女王は民衆よりずっと強かったのだから。首を斬られた時にだって、民衆に勝ってたんだわ。」

(菊池 1927)

アントワネットは正真正銘のプリンセスであり、また最期のときまで環境の変化に屈することなく女王としてのプライドを守りぬいた。断頭台に上っても女王だった。セーラもそのように生きたい少女なのである。

Saraという名前はヘブライ語の王女に由来する。原作者バーネットの少女時代はピクトリア女王の全盛期であった。女王は当時の少女たちの憧れだったことだろう。バーネットはちょうどSara Crewを書いた1887年にロンドンでのピクトリア女王の即位50年祭に出席している。

5.4.3 VULGAR ということ

"That's almost like telling lies," she said. "And lies - well, you see, they are not only wicked - they're VULGAR. Sometimes" - reflectively - "I've thought perhaps I might do something wicked - I might suddenly fly into a rage and kill Miss Minchin, you know, when she was ill-treating me - but I couldn't be vulgar."

「それじゃ、うそを言うようなことですもの。嘘なんて ねえ悪い子とだけじゃないわ 卑しいことよ。ときにはわたしも」と考えるような顔をして、「何か悪いことをするかも知れないと思うことがあるのかと腹をたててミンチン先生にとびかかったり、ねえ、ほら先生がわたしをいじめる時のことよでも、卑しいことだけは、わたしにはできないわ。……」(伊藤 1956)

「そんな嘘をいうものじゃアないわ。嘘は悪いばかりでなく、卑しいことよ。だから、御本を読んだのは、セエラだと仰しゃればいいじゃアないの？」(菊池 1927)

ここでVULGARが大文字で表記されている。このように特定の語が大文字で書かれていたり、またコーテーションマーク “ ” が付してある場合は、何か強調したい意図があると考えられる。だいたい、その時代その社会固有の象徴的な意味合いがあるという認識で「いわゆるVULGAR」と解釈する。同じ共同体の者同士においては暗黙知の流行語のようなものの場合もある。つまりVULGARといえば、誰もが思い浮かべる共通のイメージがあったと考えられる。

大文字のVULGARが象徴するイメージとは具体的にどのようなものだったのか。本文の通常のVULGARを確認してみると、たとえば自分をいじめる料理に対して次のように使われている。

when the cook had been vulgar and insolent;

料理人がぞんざいな言葉でどなりちらしても(川端 1961)

また、以下はいじめるミンチン先生に対するセーラの独白だ。

" You don't know that you are saying these things to a princess, and that if I chose I could wave my hand and order you to execution. I only spare you because I am a princess, and you are a poor, stupid, unkind, vulgar old thing, and don't know any better."

「あなたは公女さまにむかってそんなひどいことを言っているのに、気がつかないんですね。もし、わたしが生しようとさえ思えばわたしのあいずしで、あなたなんかひどい目にあわされるのですよ。わたしは、わたしのほうが公女様でああなたはわけのわからない、あわれな、心の冷たい、つまらないとしよりで、ほんとうのことを知らないのだ、と思うからこそ、ゆるしてあげているのですよ。」(伊藤 1956)

「あなたは公女さまにむかってそんなひどいことをいっているのを知らないんですね。もし、あたしが生しようとさえおもえば、あたしのあいずしで、あなたなんか処刑されてしまうんですよ。あたしは、あなたがあわれでおろかな、不親切で下品な年よりで、ほんとうのことを知らないとおもうからこそ、身のがしてあげているんですよ。」(谷村 1985)

どのvulgarも訳者によって微妙にニュアンスが異なることもあり大文字VULGARの実態をつかむのは難しいがセーラにとって敵と思しき苛める料理人やミンチン先生に使われる強い否定の意味合いのようだ。VULGARは絶対に「なりたくない」状態を形容するものであろう。

さらに、もう一つここでkillに触れておきたい。セーラのミンチン先生に対する感情においてkillという言葉が使われている。Killは勿論「殺す」という意味である。感情を押し殺す 'to put an end to a feeling, etc' (Oxford American Dictionary) 意味で使われるが、それにしても強い表現である。日本語でも「殺したいほど憎い」という言い方があるがわけだが、小公女邦訳については見る限り「ころす」の言葉を使っているのは現代の翻訳者谷村ただ一人だった。

あたしだって、なにかわるいことをしそうだとおもうことがあるの ミンチン先生があたしをいじめるときに、かっ腹をたてて、先生をころしたりとか (谷口 1985)

日本語で「殺したいほど」という表現があり、ここも「怒り心頭して殺したいほど憎くくても」という解釈で何ら問題がないように思える。だがおそらく日本の読み手に対し作品イメージに配慮したものと考えられる。

翻訳物には往々にしてこのようなことがある。たとえば有名な絵本『ピーターラビットのおはなし』原作はちょうどA Little Princessと同じころ1902年に書かれたものだが、この邦訳版はいくつかの挿絵が抜かれている。たとえば「ピーターたちのお父さんが、マクレガーさんにつかまってパイにされてしまった」というくだりに対応する絵が、消されている。子供向けの優しい絵本において、主役ピーターの家の悲劇は好ましくないということだろうか。だが、消された挿絵のマクレガーさんの一家が皆幸せそうな顔していた。マクレガー家にとっては、この日、農作物を荒らすウサギを見事につかまえ、ごちそうにも食べられた喜ばしい日である。すなわち主人公にとって残酷な場面も、別の登場人物からすれば最高の幸福ということがある。原作は主人公の目線のみから語られてはいない。そう考えれば、この絵を消してしまうことはあまりにも一方的で勝手な解釈のように思えるのである。

5.5 セーラのまなざし

5.5.1 中産階級

1) ミンチン先生:Business woman

ミンチン先生は学校を営む独身女性でありBusiness womanと表現されている。

~ which was a thing Miss Minchin understood as a business woman, and did not enjoy. 179

ミンチン先生はその話を実務家として理解したがよるこびはしなかった。(伊藤 1956)

Business womanの彼女と全く同じ位置にあるのがクルー大尉の死を告げに来たバロー氏だ。バロー氏は事務弁護士 (solicitor) であり、上流層の世襲による法廷弁護士 barristers と区別される。バロー氏は本文には business man とある。

Mr. Barrow was a shrewd businessman, and felt it as well to make his own freedom from responsibility quite clear without any delay.

バロウ氏はぬけめのない事業家であったから、いまのうちに責任からきれいに身を引いてしまおうとかがえた。

同じ階級の人間のことは分かる (He also knew) ため、バロー氏は自分と同じ位置づけにあるミンチン先生のことを理解している。

He also knew that Miss Minchin was a business woman, and would be shrewd enough to see the truth. She could not afford to do a thing which would make people speak of her as cruel and hard-hearted.

彼はまたミンチン先生もなかなか目先のきく人だと思っていたので、その道理に気がつくはずだと思った。自分が残酷な冷たい心の持ちぬしだといううさをまきちらすようなことをするはずがない、と知っていた。

business woman、business manの彼らは狡猾でずる賢い (shrewd)、しかし人の評判 (冷酷とみなされる) を無視する余裕はない (could not afford to do)。これは上流から眺めた中産階級像だ。could not afford to doの第一義は「金銭的余裕がない」である。ミンチン先生たちは、上流階級の資産を当てにしている。ミンチン先生は上流階級の子をもらわねばならず、バロー氏は上流階級の家で雇われねばならない。したがって上流階級の人間の評判を無視することはできない立場というわけである。

上流階級は特権 (privilege) 階級ともいわれる。いわゆる貴族 (上流階級) とは「一定の家系に生まれたことによって一般人とは区別され、世襲的な法的・政治的特権を与えられた人間あるいはその集団 (『百科事典マイペディア』) をいうのだ。つまりうまれながらにして特別な権利を持っている。ミンチン先生は、その特権を享受したいわけである。

以下二分のprivilegeはまさにその「特権」の意味である。

ミンチン先生にとってセーラを迎えることは特権を得ることであった。

"It will be a great privilege to have charge of such a beautiful and promising child, Captain Crewe,"

クルウ大尉さま、こんな美しいおひきうけするのは、ほんとうにうれしいことでございます (伊藤 1956)

Sara was to be what was known as "a parlor boarder," and she was to enjoy even greater privileges than parlor boarders usually did.

セーラは高等寄宿生になるはずだった。しかも、ほかの高等寄宿生よりもいっそういろいろの便宜をあたえられることになっていた。(谷口 1985)

ミンチン先生にとってセーラを「ひきうける」ことは大いなる特権 (great privilege) であり、そしてセーラは他の生徒以上の大気な特権 (greater privileges) を与えられるべき生徒だったのである。

2) Fish eyes

She had large, cold, fishy eyes, and a large, cold, fishy smile.

ミス・ミンチンは魚のような冷たい大きな眼をして、魚のような微笑みかたをしました。(菊池 1927)

Fishy(魚のような)はミンチン先生を象徴する形容詞だ。「魚」を用いた比喩的な表現だが、このような比喩表現というのは書き手と読み手の間に共通認識がある事柄についてしか使用できないというのが原則だろう。たとえばここでは「魚」に対して我々日本人と英国人の認識にずれがあると読み取りに誤差が生じる。

さて英国では魚というのはあまりイメージが宜しくない。そもそも魚は食べ物として認識されていないとさえいわれる。日本では刺身など「魚」は食べ物として大変好まれており、両国かなり認識が違う。そうしたことはイディオムなどにも反映されていて、たとえば日本語では「水を得た魚のよう」(like a fish back in getting water)などと言うが、英語ではlike a fish out of water(場違いに感じる、居心地が悪い)という。日本にも「腐った魚の目」という表現がありミンチン先生の「魚」のイメージはそちらに近いが、英語のfishyはもっと「うさんくさい」イメージでミステリー小説などの犯人に対して使われたりする。

3) Respectability

ミンチン先生ら中流階級の下層の物たちは自分たちより下の労働者階級と差別化をはかり、そして上の上流階級に少しでも近付きたかった。Respectabilityは、そうした彼女たち階層の上昇志向を表す。19世から20世紀にかけては「ローアーミドルパッシング」が目立ってきたときだった。彼らの上昇志向(respectability)は「分をわきまえない」ものとして上からは疎まれ下からは嘲られた。Respectabilityは元来、身だしなみ、振舞い、高い教養など、上流らしさを総称する言葉として使われてきた。そもそもビクトリア女王がこれを実践する生活信条を示したことから上流階級が無視できなくなったものである。そして、貴族・ジェントリーには生まれながらにして備わっているものだが中流階級は努力して身に付けなければならないものであった。そのようなことからRespectabilityは中流階級に対しては内面ではなく外見だけは他人から「立派」に見えることを追求する虚栄の姿勢の意味で使われた。

"Coverlet dingy and worn, blanket thin, sheets patched and ragged," he said. "What a bed for a child to sleep in - and in a house which calls itself respectable!"

こんなベッドに寝かせるなんて。しかも、えらそうなことをいう学校のなかでさ！(中山 1993)

とにかく、教育をしようという人間の家で、こんな寝台に子どもを寝かせるなんて。(伊藤 1956)

セーラは金のことをはなすときのミンチン先生が嫌いだ。

When Miss Minchin talked about money, she felt somehow that she always hated her - and, of course, it was disrespectful to hate grown-up people.

金に対するミンチン先生の強欲な態度がdisrespectfulだと言っている。

ローアーミドルは上流階級と見られたい。そのために、着飾り、部屋を飾り立て、使用人を置く。金がなくともそうしなければならない。そして英国階級社会では、ひとたび「商売」に手を染めてしまえば、どれほど高収入を得ようともはや上流とはみなされない。

英国の作家サマーセットモーム(William Somerset Maugham, 1874 - 1965)『人間の絆』でも次のように使われている。

It was no one of the more crowded of those cheep restaurants where the respectable and needy dine in the belief that it is bohemian and the assurance that it is economical.

そこは上品ぶっているが金のあまりない者が気がおけなくて安いというので利用するような安レストランとはちがうところだった(行方, 2001, 中 p 166)

バーネットは現実の中産階級の考え方を問うている。規制の価値観の枠にとらわれ下をさげすみ上をまねるだけでは何も解決しない。実際にそのような中産階級は当時上からは疎まれ、下からは「見栄を張り無理しているだけ」と軽蔑されていた。

5.5.2 労働者階級へ

1) ベッキー

But she did not look -- poor Becky -- like a Sleeping Beauty at all. She looked only like an ugly, stunted, worn-out little scullery drudge.

Sara seemed as much unlike her as if she were a creature from another world.

しかし見たところ、かわいそうに、ベッキイはお話のなかの人のように美しくなかった。ただのみっともない、小柄の、つかれきった下働きの女中としか見えなかった。

サアラはそれにくらべると、よその世界から来た人間のように、まるでちがって見えた。(伊藤 1956)

セーラが自室に戻ると、そこには召使のベッキイが寝入っていた。まるで眠り姫 (the Sleeping Beauty) のようにぐっすり寝込んでいるが、眠り姫のように美しくはない。醜くい (ugly)、発育不良で (Stunt)、やせ衰えて (worn-out)、小さい (little) と食器洗い場の労働者 (scullery drudge) の実際の姿を描写する形容詞が並んでいる。先述したとおりオーウェルによれば労働者は不潔という感覚だった。そういう現実を前提に、少女が眠り姫のように美しくはなかったとリアルに描かれている。

2) One of the Populace

13章のタイトルOne of the Populaceは訳者それぞれに次のように訳されている。

人の子 (菊池, 1930) (佐々木茂索, 1930)

ひとりの人間 (伊藤整, 1956) (川端, 1961)

くらしをせおって (曾野, 2007)

人民のなかのひとり (谷村, 1985)

13章はすでに父を亡くしミンチン先生に虐げられ苦勞しているセーラが落ちていた金4ペンス銀貨を見つける場面だ。空腹のセーラに夢のような出来事なわけだが、セーラはまず落とし主がいなか確認した後、その金でパンを買う。ところがそこに自分以上に腹をすかせた乞食の少女を見つけ、その少女にパンをやってしまう。'One of the Populace'はその乞食の少女のことを指している。

乞食の少女を目にしたセーラは呟く。

The child? this "one of the populace"

この子だって人間だわ (伊藤, 1956)

この子だって一人の人間だわ (川端, 1961)

この娘もやっぱり人の子なんだわ (菊池, 1927)

この子も苦勞しているんだわ (曾野, 2007)

その子どもー人民のひとり (谷村, 1985)

この場面は元のSara Creweにもあるが訳者若松賤子はこれを「下等社会の1一人だろー」と訳している。Populaceは大衆(民衆)の意味だ。セーラが目線からは確かに下等であり何より階級の意識が最も色濃く反映されているのはこの若松訳のように思える。若松訳を読めば階級の意識が感じられるのではないだろうか。

6 . 階級を超える

6.1 言葉

I wonder if I could QUITTE forget and begin to drop my H "S

何もかも忘れてHの音まで落としてしまうようになったらどうしよう。

「Hの音」を落としたしゃべり方とは、労働者階級が話す、コックニー訛りのことである。英語の訛りは地域によって大きく変化する。言葉遣いは階級差の重要な指標だ。階級の枠を超えて階段を上りたいのであれば、とにかく教育によってこの訛りを直し標準英語を使えるようにするしかない。現代においても労働者階級の者が上層に上るためには、まずその喋り方を変えねばならない。実際に労働者階級出身のサッチャー元首相が、訓練して自分の発音をRP (Received Pronunciation : 容認発音)というオックスフォード大学、ケンブリッジ大学などパブリック・スクールで話されていた英語に変えたのは有名な話である。

父が亡くなり、生活が一変したセーラは日夜労働を強いられ勉強する時間がない。セーラは、それまで学習したことを何もかも忘れ労働者階級のコックニー訛りがうつってしまったら大変だ、何としてもそれだけは避けたいというのである。

コックニー訛りは英国人にも理解できないほど癖が強く外国人には同じ英語とは到底思えないものである。1900年から1903年ロンドンに滞在した夏目漱石は日記に次のように綴っている。

日本にいる人は英語なら誰の使う英語でも大概似たもんだと思っているかも知れないが、やはり日本と同じ事で、国々の方言があり身分の高下がありなどして、それはそれは千違万別である。しかし教育ある上等社会の言語はたいいて通ずるから差支ないが、この倫敦のコックネーと称する言語に至っては我輩にはとうてい分らない。これは当地の中流以下の用うる語で字引にないような発音をするのみならず、前の言ばと後の言ばの句切りが分らないことほどさよう早く饒舌るのである。(漱石, 1929, p254)

またモーム「人間の絆」では主人公フィリップの上司ジェイコブズという医師がコックニー訛りが強いために生来の身分を隠せず「awful bounder(成り上がり者)」と呼ばれている。

Hの音を発音するか否か、それは中流か下流の分かれ道だ。特に中流の中の下層にとってH音は労働者階級との差別化をはかる言うなれば最後の砦だった。

「貧しい中産階級の家に生まれたオーウェルは、次のように言っている。

何がどうなろうと。われわれにはHの発音のほかに失うものは何ひとつないのだから

「H音」のことは原作の国の読者にとっては常識の範疇であり馴染みの話題だ。しかし我々日本人にはどうであろうか。今でこそ先に述べたサッチャー首相の話や映画マイ・フェア・レディなどから知っている人もいるだろうが。たとえば漱石の時代は多くの英米人が「お雇い外国人」として日本で仕事をしていただけだが、その中にコックニーを母語とする人はいなかったはずだ。

そこでセーラの独白の個所の訳を改めて確認したい。

"If I do not remind myself of the things I have learned, perhaps I may forget them," she said to herself. "I am almost a scullery maid, and if I am a scullery maid who knows nothing, I shall be like poor Becky. I wonder if I could QUITTE forget and begin to drop my H'S and not remember that Henry the Eighth had six wives."

「あのかわいそうなベッキーみたいになるわ。まるっきり、わすれてしまうなんてことがあるのかしら。歴史がうるおぼえになって、ヘンリー八世が六人のお妃をもっていたということもわすれてしまうわ」(川端, 1961)

「そして、もし何も知らないとなれば、わたしはあのかawaiiそうなベッキイと同じことになってしまう。わたしはすっかり忘れてしまうだろう。そして、歴史のことがうるおぼえになり、ヘンリー八世が六人のお妃を持っていたことなんかも忘れてしまうだろう。」(伊藤, 1956)

「気をつけないと、習ったことまで忘れてしまいそうだわ。これで、何にも知らないとすれば、ベッキイと選ぶところがなくなるわけだわ。でも、私忘れることなんて出来そうもないわ。歴史の勉強なんか、殊にやめられないわ。ヘンリー八世に六人の妃があったことなんか、忘れられるもんですか。」(菊池, 1927)

「あたしはまるで下働きみたいだ。そして、もしなんにも知らない女の子になったら、あのかawaiiそうなベッキーとおなじことになってしまう。hの音をおとしてだらしくしゃべったり、ならったことすっかりわすれてしまっ。れきしのことがうるおぼえになり、~」(谷村, 1985)

以上見直した結果「H音」についてのくんだりが出されているのは1985年の谷村まち子訳のみであった。

6.2 教育

セーラは勉強ができないことを心配する。教養を身につけていることは上流の証だが、そのために教育を受けることができるのは上流層の特権であった。オーウェルという英国の教育が階級の問題というのはそういうことだ。だからこの当時よく読まれていた学校物語というのは究極のところ上流階級の物語だったのである。

G・オーウェルは1940年「少年週刊誌」というエッセイの中にこんなことを書いている。

学校物語の最初に新しいことを紹介する時、よく使われる言葉はまさに「それはたいした一流校だった」という文句である。...労働者階級の人物がとうじょうするのは、たいてい浮浪者や囚人を笑い者にする時の道化役として...そして、お定まりのことだが、話の主人公たちはみんなBBCのようにしゃべらなければならない。・登場人物たちはスコットランドなまり、アイルランドなまりでしゃべってもかまわないのだが、主人公だけはhの音を落としてしゃべってはいけないのだ(オーウェル, 1996, p190)。

学校物語の大半の舞台であるパブリックスクールは、多額の寄付金と授業料を要する。そして一般にパブリックスクールを経た者が大学に進学する。結果的に、大学やパブリックスクールは、金のある上流階級や上層中層階級のためのものであった。

一方、労働者階級出身の子供は、「教育の重要性」について「教育」されていないため教育を受ける理由が理解できなかった。彼らは高学歴を望み、それに何かを期待する中産階級を軽蔑さえしていた。そんなふうに教育に関しては階級によって考え方が全く違ったから、結果的に教育は階級格差を強めこそすれ、その差を埋めるものにはなっていなかったのである。

英国では1870年基礎教育法(フォスター法)で初等教育が義務化され1902年教育法(バルフォア法)で中等教育が求められている。しかしながら1902年時点中等教育就学率はわずか14%で定着しつつあった初等教育も労働者階級の子供たちにはなかなか浸透していない。19世紀末から20世紀初頭は、教育へのアクセス拡充を図ったかげで階級差による教育の分断が放置されていた時期でもあった。

ただし、そのような教育の現実が問題視されていたことも確かだ。産業社会となった近代では下層の無教育は生産性に直接影響する。また人々が労働を求めて産業のある都市部に集まってくるため異階級と共存することを考えねばならない。教育は社会の発展のためにも、そして秩序の維持のためにも必須なものであることは明らかだった。そうした意識は同時代の小説にも示されている。

教育のない者の行動はフランケンシュタイン~人間の性質は多く備えていても善悪の相違を知る魂を与えられていない怪物『メアリー・バートン』(相川, 1999, p163)

貧乏人がどうして人に親切にすることができるか...教育も受けなくて『説き伏せられて』(富田, 1998, p27)

6.3 マネー : Can I work?

英国階級社会では、まず労働しているか否かで二分される。どれほど貧しかろうが生活のために働けば、そのような身分とみなされてしまう。だから経済状態は必ずしもその人物の社会的位置付けに直結しないという特徴がある。

You are like Becky-you must work for your living."

To her surprise, a faint gleam of light came into the child's eyes-a shade of relief.

"Can I work?" she said. "If I can work it will not matter so much. What can I do?"

「～おまえはもう、ベッキと同じことさ。自分で働いて、自分の口すぎをしなければならないのだよ。」
意外にも、セエラの眼には、ふと輝きが 救いのかげが浮んで来ました。
「働かして下さいますの？ 働かせやすりゃア、何もそう悲しかアありませんわ。何をさして下さいますの？」(菊池 1927)

ミンチン先生の To her surprise(驚いたことに)はwork for your living(生活のために働く)に対して予想とは反対の反応を示したからである。労働(work)を嫌悪するものと思っていたところセーラは意外にも安堵(relief)の表情を見せる。

「働かねばならない(you must work)」と義務的に言うミンチン先生に対して、セーラは「働ける(Can I work?)」と可能性で受ける。

たとえばセーラの物語より少し前に書かれたジェーン・オースティン『説き伏せられて』(Persuasion? 1818) 身分違い(准男爵Sirウォルターの次女アンと海軍士官のウェントワース)の二人の恋愛模様が描かれたこの作品の次のような考え方が当時の中産階級以上の一般的なものである。

「わたくしずっと以前から堅く信じておりますけれど、実際どんな職業でもそれぞれに無くてはならないもの、尊いものでございますけど、まあいつまでも達者でいられるというしあわせは、職業に就かないですむ方、時間も勝手に使え、自分の好きな事ができ、財産で食べていけ、お金を殖やそうと齷齪しないですむ方、まったくそういう方だけに恵まれた運でございますわ。そういう方以外には、どんな方面の人でも、そろそろ若さを失いかける時分には、どうしたって幾分器量が落ちてまいりますわ。」(ウォルター卿に対するクレイ夫人の言葉)(富田, 1998, p32-33)

ジェーン・オースティンの小説には労働者は登場しない。一方セーラの物語では労働者が肯定的に描かれている。事業家(business woman)のミンチン先生が完全なる悪役であるのに対して労働者(working-woman)のパン屋のおばさんというのが善良な市民として登場する。

上流階級には慈善行為を行う慣習がある。セーラの物語の中でも裕福な少年がみすばらしい身なりのセーラを乞食と間違え6ペンス恵む場面がある。

わたしは週に四ペンスほど使った 四種類のキャンデーをそれぞれ一ペニーずつ、それから浮浪児のための寄付一ペニー [ホールのテーブルの上にある貯金箱](『アガサ・クリスティー自伝』)(乾, 1995, p113)

この上流の慣習に労働者階級のパン屋のおばさんが習う。

I am a working-woman myself and cannot afford to do much on my own account, and there's sights of trouble on every side; but, if you'll excuse me, I'm bound to say I've given away many a bit of bread since that wet afternoon, just along o' thinking of you - an' how wet an' cold you was, an' how hungry you looked; an' yet you gave away your hot buns as if you was a princess."

私はその日暮らしの労働者の身ですから、自分の力ではとても大したことは出来ません。それに困っている人たちはそこら中にいます。でも、あの日の午後お嬢さんが、あんなにびしょ濡れでお腹もすいていたでしょうに、あの娘にパンを施している姿を見てから、私も何度も困っている人たちにパンを恵んでやりました。(伊藤, 1956)

わたしは自分もこうしてはたらいっている身分ですから、自分の力ではたいしたこともできません。でも、こんなことをもうしては失礼ですけど、あの雨のふっていた午後、あんなにぬれてさむそうだったあなたが、とてもひもじそうなようすをしていながら、まるで公女さまみたいにあのパンをほどこしてしまわれたのを見て、わたしもあれ以来、なんどもパンのほどこしをしてきたんですよ。」(谷村, 1985)

do much on my own account(on one's own account)とは自分の責任で暮らしているという意味であり、すなわち労働により稼いだ金で生計を立てているということである。

労働者(working-woman)階級のパン屋のおばさんはセーラが乞食に「ほどこし」をした行為を見習う。セーラは、自分がひもじくしながらも自分より飢えていると思われる乞食の少女に手に入れたパンを与える。上流階級としての慈善行為だ。労働者階級のパン屋のおばさんがそれに習う。労働階級のおばさんは、労働によって得た資金で乞食の少女を食べさせる。それは上流階級の固定資産による慈善に代えて労働者が労働により作りだした資金によって他者を救うことである。原作者はこれを肯定している。

19世紀は、いままでのどの時代にもまして、すべての階級が金に基盤をもつようになった。地主たちでさえ、今や生まれよりも金に徹底的に信頼をおくようになった。トップクラスの貴族たちは、市場によって決定されるような貨幣価値をもったもろもろの資産 農場、都市不動産、炭鉱などを独占することで、巨万の富を獲得した。18世紀末のW .ピット宰相は、2万ポンド(現在換算1万ポンドが200万ドル、約4億円)の年収を持つ人なら誰でも希望に応じ貴族の爵位が与えられるべきだと主張している。しかしながら英国階級社会が貴族社会から移行するのはそう単純ではない。18世紀世界屈指の商業発達国となったイギリスにおいて、その社会構造には、すでに社会的変動の要因が内在していた。しかしながら結局イギリスは、19世紀を超えて第一次大戦に至るまで、多くの面で貴族社会的要素をとどめていた。階級の区分は、生活のために働く必要のない人・ある人、何らかの財産のある人・無い人で大別されていた。つまり労働によって作られたマネーによって階級を上ることはできなかった。上流階級に生まれついた者は金がなくとも何とか予めある資産を節約しながら、その身分を死守しようし、労働せず召使を置き体面を保つことのみ躍起になった。たとえば、上流の下に位置する中産階級も経済活動の自由が保証されている限り政治的な支配は上流階級に任せていた。彼らは商売によって掴んだ自分たちの経済力を軽視し、階急上昇の手段にしようという考えには至らなかったのである。

おわりに

貴族政治の末期というのは「言葉がなくなる」といわれている。自分たちのやろうとしていることを有効に表現する言葉がなくなって、社会のニーズに応えられずに先も見えなくなっていく。国民が不安を覚えても納得させることができない。フランス革命前夜には、言葉を使える人たちの才能はみんな政治ではなく文芸のほうに流れていった。モンテスキュー、ヴォルテール、ルソーといった人たちがそうである。それに比し、政治のほうは言葉をどんどん失っていく。そして革命で貴族たちが倒れたときに、言葉をもっている人たちが政治の舞台にどッと現われた。

翻って同時期の英国は世界屈指の商業発達国でその社会構造に大きな変動要因が内在していた。フランス同様貴族政治には終わりを告げる時が来ていたはずだが英国の場合は、19世紀を超えて第一次大戦に至るまで、多くの面で貴族社会的要素をとどめていた。生活のために働く必要のない人・ある人、何らかの財産のある

人・無い人で上下に大別される階級構造は変わらず、何より人々にそれを変えようとする意識が希薄だった。バーネットは、そのような英国の物語の中に様々な階級の人物を置きそれらの人物にそれぞれの立場から発言させている。

彼女が自著の中でも力を入れて書いたことを認める ‘Lady of Quorlity’ について当時の書評は作品の時代考証を認めている。

Clorinda Wildstairs, the motherless child of a hard-drinking, vulgar country gentleman, is a character of great originality. Keeping closely to the language and manners of the times, Mrs. Burnett sometimes offends modern squeamishness, but she has produced a book of strong originality (Literary news, a monthly journal January, 1897)

酒飲みで下品な田舎のジェントルマンの娘で母親のいないクロリダは極めて斬新な人物だ。バーネットは時代の言葉や態様に厳密に沿い、昨今の堅物を怒らせることもあるが、そうして独自性のある本を生みだしている。(筆者訳)

社会の制度や構造を変えたいのであれば、最終的には法律を変えるために政治を動かせる人物に働き掛けねばならない。その場合、おそらく現在でもメディアの力を借りることを考えるだろう。新聞やテレビで取り上げているというような「世論」が動いているという状況を作り出すことが変革へ向かう追い風となるからだ。そのためにはまず何か「事件」を作り、たとえば通常負ける裁判と分かっているにもかかわらず数年かかって世論に訴える方法で戦い「勝利的な和解」状態に持っていく。そうしていく先に変革の可能性が見えてくると考えられる。「ミンチン先生の学校で起きたこと」とはつまり、その事件ではないか。バーネットはセーラの学校社会での事件を作り上げ、それを本というメディアにのせて発信した。彼女もやはり社会に対する言葉を政治ではなく文芸のほうに向けた。

バーネットの作品の人物たちは社会に対して、それぞれの立場から発言している。奇しくも上下両階層に立ったセーラをはじめ、中産階級のミンチン先生も労働者階級のベッキーも、皆その階層に生きる人々の声を代弁している。彼女たちの声は同じ共同体に生きる原作者バーネットに聞こえていたものであり、そしてまた共存している者にも当然に聞こえているものであった。その意味で原作者は、その階層の「型どおり」の人物像を作り上げたと言える。

しかしながら、翻訳という観点に立ったときこれをどう表現し伝えればよいのか。作品の世界の現実を知らない外国人には既知の「型」がない。原作者が分かりやすく「型どおり」に描いたものも、その「型」を知らなければ、その「型」にはめ込むことができないのである。たとえばミンチン先生の「魚の目」やクルー大尉の「イートン」など、それを「言葉のとおり」に訳したところで異国の読み手には言葉以上の意味はもたない。原作者が読み手に分かりやすいようにと配慮した修辭的な文句も、その文化に生きない者にとっては不可解なだけということもある。情報伝達が目的の文章であれば内容の正誤が最優先であるから正しい理解のために必要なだけ説明を付すのがよいかもしれない。だが文芸作品の場合はどうだろう。内容のみでなく表現自体も込みで原作者が作り上げた世界である。やみくもに説明を挿入しては読者を現実に引き戻してしまいかねない。

さらに小説というのはまだ言葉にされていないことを表現するためのものともいえる。言葉にされていないことを読みとるとなれば、それは読み手の想像力に委ねられたということである。そこに書き手と読み手の環境が影響することは否めない。ゆえに異環境の者同士であれば誤解も避けられないといえる。

では翻訳文学をなぜ読むのか。日本にはここで取り上げた小公女のように遥か昔から読み継がれてきた古典といわれる翻訳作品がいくつかある。これら古典翻訳作品は昨今新訳版が改めて出されたりしている。つまり時代を越えてなお人々に求められているということである。現実にある国のある時代の社会事情が別の国で別の時代に再現されることはままある。たとえば後進国が発展した先には先進国で既に起きた問題が提示されるという具合に。翻訳文学には同時代性を求めることは難しいが、逆に将来性は大きいと期待できる。だからこそ読み継がれているのだろう。

『小公女』は日本において2009年テレビドラマ化された。大まかな話の筋は原作に沿うものであったが現在

の日本の視聴者に配慮したものか人物設定など本項で扱った訳本と異なるところもあった。たとえばベッキーはテレビドラマの中では男の子であった。男の子の使用人としてセーラとの恋愛を匂わせるように脚色されていた。勿論より多くの視聴者を引き付けるためだろう。

だが、では原作のベッキーはなぜ女の子なのか。バーネットはこれを男の子にしようとは考えなかったのか。イギリスでは1770年代以降、「使用人税」と呼ばれる男性使用人に対する税金が課せられていた。女性使用人の賃金水準は、一般的男性使用人の半額～20分の1といわれている。だから女子のメイド市場は安価な労働力として隆盛していた。そんな事情であればミンチン先生の学校に置かれる使用人は女子でしかありえなかったということになる。

翻訳文学は外国の社会事情とともにある。描かれた国の慣習や思想、風土なども込みで読まれるべきであり、そのように翻訳されることが最も望ましいように思う。

だが文学作品は情報伝達を目的とするものとは違う。人々は必要に迫られて読むのではない。読みたいという欲求のもとに読むのだ。したがって正しさが必ずしも優先されるとは言えない。興味深く、かつ、読みやすいものが求められる。当然読者を引き付けるためにアレンジされることがあるだろう。問題はそのアレンジの仕方だ。せっかく外国の社会事情が描かれているのであれば、それを読み手に伝えるべきではないか。それができてはじめて翻訳は原作から発展した形になるのではないか。

昨今の古典新訳ブームの中でも最高の話題作となったJ・D・サリンジャー『The Catcher in the Rye』(1951)の翻訳について翻訳家柴田元幸氏と村上春樹は次のように話している。

柴田「アメリカ人に、今、日本で『キャッチャー』を訳し直している作家がいると言うと、あれは五〇年代のニューヨークの話だろうって言われたりする。そんなもの翻訳できるわけじゃないじゃないかって。本来の文脈の外に出したら違う作品になってしまうはずだ、という思いがあるみたいですね」

村上「逆に、日本語に移し変えた場合のほうが、時代に合わせた融通がきくんですよ」

(村上春樹 柴田元幸著『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』)

翻訳文学はどう訳し、どう読まれるべきか。読み物は多くの読者を得るために共感性と読みやすさが求められる。共感とは他者の経験を共有・理解するということだ。外国の文学を言葉を変えてまで読むのは、まず「他者を知る」ためではないか。文学は「自分探し」のために読むということもあるだろうが、自分を知ること、まず自分とは違う他者を知ることから始まると思う。だから外国に生きる人々の生きざまが描かれた作品に対して違和感を取り払う必要はないし、またそのようにすべきではないと思う。ただ、もう一つ、読みやすさということは依然課題として残る。それは究極のところ読者の目的によって変わってくる。訳者(提供者)としては、いずれかの読者層にターゲットを絞り(それを明示して)訳すということを考えてもよいのかもしれない。

いずれにせよ翻訳文学として改めて提供するうえで一人でも多くの読者に作品の醍醐味を最大限味わってもらえるよう翻訳ということについて更に追究していきたいと思う。

引用・参考文献

参考訳本

若松賤子1894 『セイラ、クルーの話 ーミンチン先生の出来事』少年園

伊藤整1894 『小公女』新潮文庫

川端康成1961 『小公女』角川文庫

菊池寛1927 『小學生全集第五十二巻 小公女』興文社、文藝春秋社

曾野綾子2007 『小公女』講談社青い鳥文庫

谷村まち子2007 『小公女』偕成社

中山知子1993 『小公女』河出書房新社

村岡華子1964 『小公女』日本書房

原作

Frances Hodgson Burnett A Little Princess PROJECT GUTENBERG EBOOK Frances Hodgson Burnett SARA CREWE OR WHAT HAPPENED AT MISS MINCHIN'S PROJECT GUTENBERG EBOOK

和文献

相川暁子1999 『メアリー・バートン: マンチェスター物語』 エリザベス・ギヤスケル 近代文芸社
石川謙次郎1993 『変わるイギリス変わらないイギリス』 日本放送出版協会
遠藤寿子1957 『ジェイン・エア』 シャーロット・ブロンティ 岩波書店
小野協一2009 『ライオンと一角獣』 川端康雄編 ジョージ・オーウェル 平凡社, 平凡社ライブラリー
金井美恵子1982 『小春日和』 河出文庫 文芸コレクション解説
河合秀和他1982 『イギリスの生活と文化事典』 安東伸介他編、研究者出版
乾信一郎1995 『アガサ・クリステイー自伝』 アガサ・クリステイー早川書房
柴田元幸・畔柳和代2004 『空腹の技法』 ポール・オースター 新潮文庫
竹内洋・海部優子1996 『パブリック・スクールの社会学』 G・ウォルフォード世界思想社
土屋宏之, 上野勇1996 『ウィガン波止場への道』 ジョージ・オーウェル著 ちくま学芸文庫
富田彬1998 『説き伏せられて』 ジェーン・オースティン 岩波書店
夏目漱石1929 『倫敦消息』 明治文学全集55夏目漱石集所収 筑摩書房
林信吾2005 『しのびよるネオ階級社会 “イギリス化” する日本の格差』 平凡社
村上春樹 柴田元幸著2003 『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』 文藝春秋
行方昭夫2001 『人間の絆』 上, 中, 下モーム. 岩波文庫
若松, 1891 『女学雑誌』 207

洋文献

Disraeli, Benjamin, 1976 Sybil, PENGUIN CLASSICS
Burnett, Vivian, 1927 The Romantic Lady: Frances Hodgson Burnett, the Life Story of an Imagination, New York: Scribner's,
Bronte, Charlotte, Jane Eyre
<http://www.gutenberg.org/files/1260/1260-h/1260-h.htm>
Holman, C. Hugh, 1972, A HANDBOOK To Literature. 3d. ed. Indianapolis The Odyssey Press, 1972
Gaskell, Elizabeth, 1970 Mary Barton : a tale of Manchester life Penguin (Penguin English library)
New York Times (6 July 1902)
Maugham, William Somerset, 1915 Of Human Bondage New York Modern Library